第5部　文　化　景　観

I. 文　化　景　観

1. 概　説

丹沢大山国定公園候補地は，神奈川県の中央部から西よりに位置し，厚木市・秦野市・伊勢原町・松田町・山北町・津久井町・清川村の2市4町1村にまたがっている。したがって，その文化景観は，発展過程からして各市町村毎に異にしており，その各々の特色は，各市町村に属する丹沢山塊の山麓および山中にみることができ，いまなお，文化的，または人文的景観としてその現況や跡を残している土地や地名・遺跡などは誠に多い。

もともと，丹沢は宗教文化にもとづく山岳信仰によって開かれた山である。その時代はかなり古く，現在にして当初の事跡を確証することは困難であるが，山麓市町村に伝わる古文書や伝説・遺跡，および「新編相模風土記」(天保12年，1841，徳川幕府編）などがよくそのへんの事情を傍証している。

いま，それらをよりどころとして，丹沢山塊開発についての当初の事情を推定するとすれば，まず，丹沢山塊は北西方，つまり現在の津久井町から山北町におよぶ方面から開き始められたのではないかと推測される。それは，この方面の北麓沿いを流れる道志川やその支流沿いにいわゆる社宮司といわれる小社があったことが津久井郡誌にみえており，その社宮司は，神武天皇第二皇子神八井耳命の裔である信濃国造族金刺氏より出た（一説には建御名方神の神裔，御衣祝有員の後とも伝え，さらに清和源氏，満快曾孫，信濃守為公の裔とも伝える），諏訪社の大祝であった諏訪氏の部族であった諏訪族が信奉した神の祠であったともいわれているからである。

もっとも，丹沢山塊の東麓方面にあたる厚木市の戸田や上依知にも社宮神社，伊勢原町の下落合と小稲葉の社宮神社なども社宮司とみられ，その他本県下には十数社の社宮司とみられるものがあるようだが，その社宮司の分布状態からして，諏訪族はまず丹沢山塊の北方からしだいに相模をその勢力圏におさめていった結果のものとも想定される。それに加えて，前記道志川沿いの津久井町青根（丹沢山塊北麓の中心部落）に，諏訪氏の大祝をつとめた諏訪社の末社とみられる諏訪神社（創建年代不明）という小社があるのもそれとは無関係ではないようである。

以上のことは，一部の遺跡と，伝承をもとにして可能な限りの推測によるものであるが，その確証による立証はほとんど不可能に近い状態である。

しかし，降って宗教文化が仏教によって代表されるころになってからの丹沢山塊一帯の文化的

発展の過程は，その影響を大きく受けていることが明らかにうかがわれ，その遺跡や伝説も各所にみられる。その最も代表的なところは丹沢山塊東南部の一峰である大山と，その東南部に位置する日向薬師を中心とする一帯，および南麓地帯の菩提から三廻部，彌勒寺一帯の修験文化の跡などである。また修験場として開かれた現在の塔ガ岳もそのひとつである。

以下，現行の各市町村毎に，それに伴う文化景観にふれることにする。

(1)　**厚木市**（人口46,239人）

厚木市は，古くからの県央における文化交通の中心地であって，現在では丹沢山塊中東丹沢地帯向けのバス交通は多くここから出ている。本市内に含まれる丹沢大山国定公園候補地の区域はわずかにその西部地帯の七沢・大沢地区とその奥の山地のみであるが，交通上からみた本市は同候補地にいたる一大拠点地である。したがって，同候補地の利用面からすれば，本市の文化的発展はその東部地帯全体の利用性に密接に関係してくる。

ところで，文化景観的な本市との関係を特色的な面においてみる場合は，本市に属する同候補地地区が僅少である関係上，本市のそれが直接関連してくるとはいえない面がある。しかしながら，本市内に属する同候補地中の七沢・大沢地区は温泉地帯であって，その地点にかぎっていえば，本市の文化的・産業的発展の影響を強く受け，同候補地地区内の近代的慰楽地帯として発展する可能性は大きい。七沢温泉・広沢寺温泉という東丹沢地区の代表的温泉場を有することが，この地帯の文化景観的特色であるということができよう。

図 5・1　広沢寺温泉

さらに，ここには丹沢山麓における猪料理という味覚的特色ももっており，現在すでに，冬場においてこの味覚は多く賞味されている。

(2)　**秦 野 市**（人口51,285人）

本市は，神奈川県下における有名なたばこの産地で，丹沢山塊南麓の盆地状の中に開けた田園都市である。そして，名実ともに丹沢山塊登山の表玄関口をうけもっている。

本市内に属する丹沢大山国定公園候補地には，その中の主要峰のひとつである塔ガ岳の稜線から南の部分山地のほか，大山の西腹とその西南に突き出した弘法山一帯の地である。したがって，本市の山麓地帯は古くから塔ガ岳信仰の仏教文化の推移と密接な関係をもち，消長もともにしてきている。ゆえに，本市内に属する同候補地内およびその周辺の文化景観は，塔ガ岳信仰にまつわる仏教文化的であって，いまなおその面影をうかがいしるべき遺跡や伝説，ないしは地名を多

く残している。

以上についての，同候補地内の遺跡や伝説その他の文化景観については後に個々についてふれるので，ここでは地域外も含めての，地名の名残りによってその外貌をうかがっておくことにする。

本市内地に属する丹沢山塊の南麓には，菩提・坊・古堂・諏訪出・三廻部（みくるべ）・彌勒寺（西の松田町内）と，仏教語や修験系社名の地名の部落が並んでいて，そこの中心に三廻部がある。ここには，観音堂・稲荷社・地蔵堂の三つの小社や堂があって，観音堂がその中心になっている。この観音堂は観音院ともいい，山号は孫仏山といって，塔ガ岳をもと孫仏山といっていた山名と一致するのである。

以上のことから，三廻部はもと丹沢修験（山伏）の峯入り道ではなかったかと推定もされるのである。かつ寺号は福聚寺といい，天台宗に属している。つまり修験の山伏たちが，その方法のひとつとして，大山の真言宗大山寺と順逆の峯入りをした寺ではないかと考えられる根拠もここにあるのであって，そのために，この一帯には仏教語や修験系社名をつけた部落名が多いのではないかと推定されているのである。しかしながら，以上のことを裏づける史的立証はいまとなっては難事となっているというほかはない。

さらに，時代は少し降るが，同候補地の弘法山は，かつて弘法大師が来たって修験を積んだところとされている。郷土史家たちの非公式な調査報告によると，現在それに関する遺跡が発見されているとされている。しかし，空海がここに来たって修業したという事跡は明らかでなく，しかも空海が全国の各地で修業を重ねたのは出家する前後の，まだ若いころのことでもあるので，この地に伝わる一部の伝説とは悟道的に一致しないものもあるようである。後にのべる本市内およびその他の地における弘法大師にまつわる伝説は，おそらく，後年空海の功績が大々的に認められてから生まれたものではあるまいか。かれの請雨の密法の厳修はかなり著名なものであり，特に天長元年（824年）3月神泉苑で雨を祈り9日目に大雨を降らせたことは有名である。だが，当地一帯の弘法大師にまつわる伝説は，いずれも川の水を干した物語として伝えられており，そのパラドックス的人倫性に妙味がある。

以上のように，本市における丹沢山塊関係の文化景観は，塔ガ岳の修験場とか，弘法大師の伝説，さらに民間信仰の生んだ雨乞い神事などにまつわるものであって，まことに仏教文化的な要素の濃いものである。したがって，この一帯は寺院が実に多く，仏教文化がかなり古くから集約的に発展していたことを傍証している。

なお，丹沢山塊利用の表玄関口にあたっている本市は，表登山道への蓑毛と大倉とのふたつの代表的な登山口を有し，丹沢山塊登山者の大半は本市を経て登っており，本市と丹沢大山国定公園候補地とは利用上最も深い関係にある。

(3)　**伊勢原町**（人口26,984人）

この町は厚木市と秦野市との間にはさまれて位置し，丹沢大山国定公園候補地中の主要峯であ

図 5・2　ヤビツ峠山の家

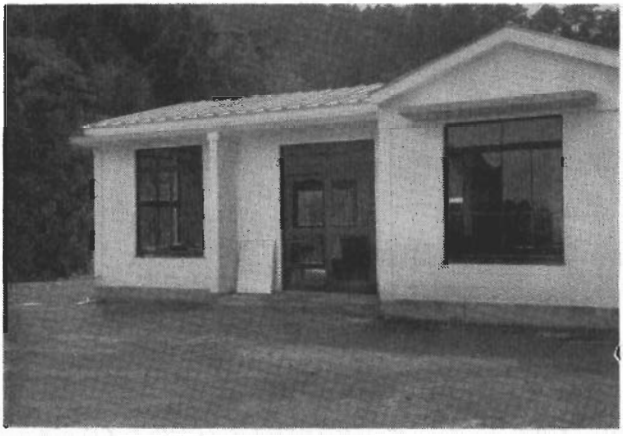


図 5・3　ヤビツ峠レストハウス

図 5・4　丹沢高原ロッジ

る大山と，かつての日向修験の根拠地であった日向山霊山寺のあったところで，両地点とも現在県内の主要文化景観地点となっている。

大山にはその仏教文化のおよんだ当初に創建されたと伝えられる大山寺があり，その本尊は重要文化財に指定されているほか，現有の本堂（不動堂ともいう）の一部には美しい彫刻もみられる。またこの山には古くから石尊権現が祭られ，現在それを奥社の神体とした阿夫利神社が祀られており，往時の信仰風俗をいまによく伝えている。その点で，同国定公園候補地中最も文化景観のすぐれた地点ということができる。

日向にはかつての霊山寺としての面影は認め難いが，現在，もと当寺の別当であった宝城坊が残っており，本尊の日向薬師以下20点あまりの重要文化財指定の仏像を有し，同候補地中最も文化財の豊かさに富むところがある。

なお，日向修験の面影はいまにして偲ぶ由もないが，宝城坊から奥の渓流沿いには，浄発願寺など二，三の寺院が散在しており，この一帯が修験者のひとつの根拠地であったことを偲ばせる程度である。

この町の同候補地内における文化景観は，以上のように秦野市同様宗教的ではあるが，現在にいたって，その遺産をなお多くとどめているのが特色的である。したがって丹沢山

塊の麓利用においては，本町内における前記二地点の利用が最も多いようである。

(4)　**松田町**（人口10,389人）

この町は秦野市の西に接する町で，その北部の山地が丹沢大山国定公園候補地内に含まれている。同候補地外ではあるが，「秦野市」の項でふれた彌勒寺という部落はこの町に属し，ここに同名の寺がある。

その点からして，この町に属す地帯の文化景観としては，ほぼ秦野市の場合と同様であって，特色的というほどもないが，やはり古い仏教文化の名残りを留めるところである。

(5)　**山北町**（人口15,839人）

山北町は，丹沢大山国定公園候補地中の西部地帯，つまり西丹沢といわれる地域のほとんどを含んでいる。しかも，東側は塔ガ岳・丹沢山・蛭ガ岳・檜洞丸と丹沢山塊中の主要峰のほとんどの稜線を連らねて他の各市町村に接している。西側から北にかけての町境は同国定公園候補地の西から北にかけての境界でもあり，山梨・静岡の両県に接している。

したがって，この町に属する同国定公園候補地域は誠に広く，全面積のほぼ3分の1におよんでおり，その大部分は山地であって，わずかにそこを流れる中川川と世附川・玄倉川沿いに小聚落がみられる程度である。

以上からしてこの地帯は主として林業地帯で，文化的発展の過程もそのテンポがのろく，宗教文化の浸透もその跡をほとんどみうけることができない。

しかしながら，そうした環境であるだけに，土俗的な民族文化の発生した，その面影を残す点ではこの町が最も顕著である。後述する「お峯入り」と「百万遍念仏」の行事がその代表的なもので，いまにして，山深い娯楽に恵まれなかった住民たちの生活への潤いを求めた姿をとどめている。

しかし，この地は山梨県と境を接している関係上，かつてはその方面からの文化の流入があったようで，はじめにのべた諏訪族の侵入路もこの地帯にあったものと推定される。

降って室町末期の戦国時代には，明らかに甲斐の武田氏がこの地帯を経て小田原北条氏に迫っている。その遺跡や伝説はいま各所で見聞きすることができ，まず，そのころの事跡を語る地帯としての特色をもったところということができよう。

なお，現在中川川の上流地帯には中川温泉が開かれており，ここは丹沢大山国定公園候補地内における最も整った温泉地であり，かつ将来性もある有望な温泉場としての可能性もあるうえに，西丹沢方面探勝の基地としても良好なところとして利用者は多い。

(6)　**津久井町**（人口13,978人）

津久井町は丹沢山塊の北部一帯を占めており，道志川以南が丹沢大山国定公園候補地内に含まれる。

ここも，山北町の場合と同様に，山間地帯である関係上さしてみるべき文化景観は存在しない。しかしながら，前述のとおり社宮司が存在したとみられる関係上，やはり諏訪族の相模への

侵入経路にあった地帯かと考えられる。しかも，ここには現在諏訪神社もあり，いずれにしても，丹沢山塊中最も諏訪文化のおよんだ地帯と想定されるところである。

なお，長者舎あたりには落人の伝説もあり，それが社宮司と結びつけられてもいて，その辺にかつての山間部落の生活様式をうかがいしることもできそうである。やはり，ここの文化景観も伝説的抽象性を特色としているといえる。

ただ，国定公園候補地外ではあるが，北からの丹沢登山のひとつの拠点地である鳥屋部落には県指定無形文化財の鳥屋の獅子舞があり，その歌詞は，山間地帯の生活性を誠に巧妙に表現している。

(7) **清川村**（人口 2,895人）

本村は厚木市の北に続く村で，その全域が丹沢大山国定公園候補地内に含まれていて，東北からの丹沢登山口にあたっている。同時に東丹沢のほとんどは本村に属し，主要な地点としては，三峰山・辺室山・経ガ岳・仏果山・札掛・別所温泉などがある。

本村もかつては山深い閑村であって，いろいろな伝説の多いところである。弘法大師・落人，そして丹沢が幕府の直轄料林であったころの伝説と，まことにそれは豊富である。

以上のように，丹沢・大山，およびそれを取りまく一帯の文化景観はまことに豊富で特色的あって，しかも変化に富んでいる。以下，それらの文化景観の中で，一応普遍性のあるものについて個々にふれていくことにする。

2. 東部丹沢地帯

東部丹沢地区とは，丹沢山塊中の大山を盟主とした一連の山稜と，仏果山，経ガ岳を合わせた区域に，その麓一帯を含めた地帯をいい，行政区画的には清川村のほとんどと，秦野市・厚木市・伊勢原町などの一部地区を含んでいる。この地帯の文化景観としては，まず古くから民間信仰の対象としてその名が広くしられている大山の文化遺産によって代表される。そのほか，弘法大師の遺跡や伝説の地，また豪族や落人などの旧跡や伝説地のほか神社・仏閣も多く，文化景観はかなり豊かである。それに加えて，丹沢山塊の代表的な登山口である蓑毛や宮ガ瀬もこの地帯にあり，またここを流れる中津川上流地帯は中津川渓谷をはじめとする美しい渓谷や渓流に恵まれ各所に温泉も散在するなど，丹沢大山国定公園候補地中の山麓地帯として最も利用価値の高い地帯であり，四季をつうじて多くの行楽客を集める所である。

(1) **神　　社**

a. **大山阿夫利神社**（伊勢原町大山）　祭神は下社が大山祇大神で，境内二摂社の内奥社は大雷神，前社は高龗神である。創建年代は明らかでないが，「延喜式」にもみえる古社で，社伝によると人皇第10代の崇神天皇のときといわれている。この山にはまず天平勝宝7年(755年)5月良弁大僧正が入山開基となって不動堂を建立したが，それ以前にすでに神社があったことは事実のようである。そのころ，ちょうど神仏習合の機が熟し，堂塔僧坊を建て，そこに霊石があったことによっ

図 5・5　菜の花台休憩所

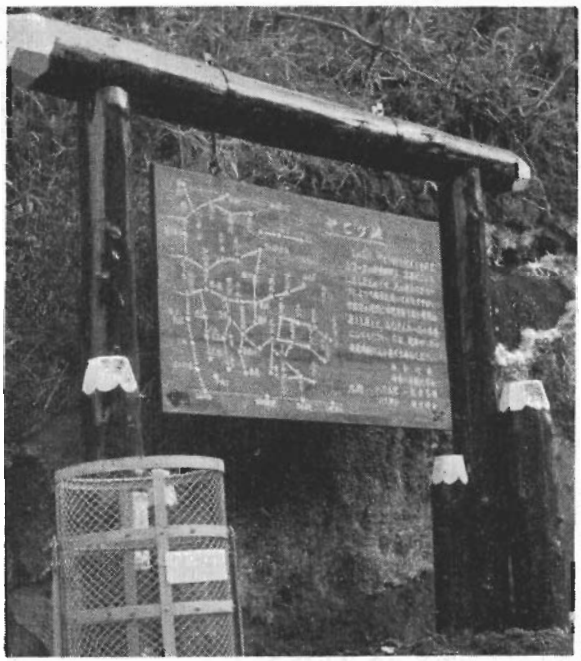


図 5・6　案　内　板

図 5・7　指　導　標

て石尊権現と称するようになり，一山をすべて雨降山大山寺と号して真言修験の道場として有名になった。以来，神職・修験・僧呂等によって混淆奉仕され，時には聖武天皇の勅願所ともなった。鎌倉時代には足利氏・北条氏の崇敬が厚く，また慶長 10 年(1605年)には徳川氏が真言の僧実雄を学頭として建物を再興，社領を寄進するなどしている。それから一般にも厚く敬われるようになり，南関東一帯の信仰をあつめるようになった。また相模湾を航行する船舶からもこの山はよく目につくので，舟の位置をしる山当として利用され，海上生活者の信心も集めた。明治になって神仏分離が行なわれたが，この神社が阿夫利（雨降）神社といわれるようになったのはそのときからである。現在大山中腹に下社があり，頂上に奥社を祀っている。参拝者はいまもなお関東各地から集まり，例大祭や春夏秋の大祭には石尊参り，または大山詣でといって白衣姿の信者の登山参拝者が非常に多く，その参道の途中には先導師の宿坊約60軒をつらねている。こうした信仰風俗をいまに残している神社は全国的にも数少なく，その昔のままに近い姿をとどめているのは当社一社だけである。なお当社には明治 6 年 (1873年) に当時の神官 権田直助翁が奈

図 5・8　大山阿夫利神社

良春日神社に伝わる神楽である「倭舞」を伝えたものがいまも行なわれて県指定の無形文化財になっているほか，元禄以来毎年神事として行なわれていた能楽「観世」も近年復活されて春秋の大祭に行なわれている。例大祭は7月27日。

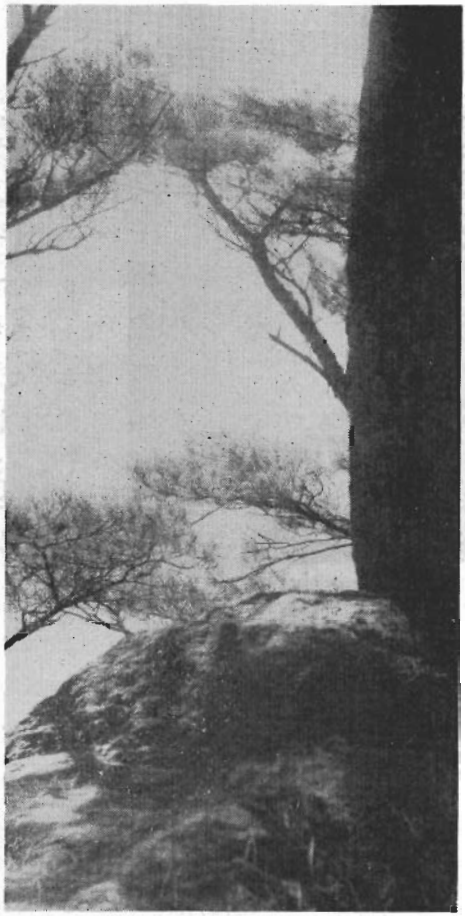
b. 浅間神社（厚木市広沢寺）　鐘ガ岳の頂上にあり，創建は不詳だが，社伝によると孝元天皇の時代のものらしい。江戸時代には相国峯回峯行場のひとつだったらしく，その行場の跡とおもえるものがいま残っている。参道にはそのころからの信者の寄進である丁目杭が並んでおり，現在では，附近農民の養蚕の守護神として信仰されている。なお，山麓から鐘ガ岳頂上までの参道には松が植林されていて，ハイキングなどには好適なコースである。その他，山中に往時の寺歴を語る仏像などが散見できる。

c. 熊野神社（清川村宮ガ瀬）　明歴元年（1655年）もと宮ガ瀬村氏子惣代井上出郎左ヱ門によって社殿が造営されたといわれ，「新編相模風土記」によると，「古は古鰐口を（銘に「応永元年9月16日。矢口入道信吉長者」とある）神体とせしが，今は失ふ」とある。この神社には，権現様が柚子の樹の刺で左眼を突かれたため少し小さくなり，それゆえに宮ガ瀬内には柚子を植えないとか，また植えても実を結ばぬという伝説があり，さらにそれから以後生まれる子供達は左眼が小さくなったともいい伝えられている。なお，社殿は小さいが，形の整った美事なものである。

(2) 寺　院

a. 大山寺（伊勢原町大山）　真言宗大覚寺派準本山で，雨降山と号し，俗に大山のお不動様とよばれている。この寺は天平勝宝7年（755年）大山石尊大権現の別当寺として良弁僧正の開いたものだが，それから500年後に願行上人が諸国を巡暦して鎌倉大楽寺に住したさい，この地に登って再興の大願を発し新たに不動明王像を鋳造したといわれている。爾来参詣者多く，鎌倉より江戸幕府にいたるまでは歴代の武将の信仰厚く，常に伽藍を修造し寺領を寄進するなどして隆盛をきわめた。往時は八大場または13坊あったというが，いまその内の三坊合体して大山寺とよんでいる。明治初年神仏分離により寺領を失ったが，信徒の信仰厚く，明治17年（1884年）に現在の本堂を，大正3年（1914年）に宝筐印塔を建立し今日にいたっている。

本尊の鉄造不動明王坐像および矜羯羅，制多迦両童子（以上重文）は鎌倉時代の作であり，玉眼嵌入（後補）だが，その両眼を開き，歯牙を露わにした形相にはこの時代の精神を反映して豪壮な趣がある。この作風には，他の二童子の素朴であどけない表情とあわせて作者のなみなみなら



（上左）図 5・9
鐘ガ岳頂上にある石造不動明王（後方は旧像）

（上右）図 5・10
浅間神社参道にある「のぞき松」

ぬ手腕をみることができる。なおこの外に願行上人像と伝えられる肖像彫刻もある。現在この寺は阿夫利神社下社への参道の途中にあり，宝筐印塔を添えた本堂の建築は観賞にたえるものである。

b．**宝城坊**（伊勢原町日向）　俗に日向薬師とよばれているもので，もと正式には真言宗日向山霊山寺といった。この霊山寺にはかつて12坊あり，明治維新後，11坊が廃絶し，寺の主務を司り，別当であった宝城坊のみが残り，現在その霊山寺の寺跡をついで宝城坊といわれている。寺伝によれば，元正天皇霊亀2年（716年）行基が開基と伝えられ，箱根二所権現（現在の

図 5・11　不動堂正面

図 5・12　大山寺不動堂

図 5・13　宝　城　坊

箱根神社）と並ぶ真言修験の道場であったという。また古来日本三薬師（越後の米山薬師，土佐の柴折薬師または三河の峰の薬師）のひとつとして知られ，貴賤の尊信が厚く，源頼朝も妻政子の病気平癒の祈願に参詣したことが「東鑑」に書かれているほどの名刹である。

現在堂内には本尊の木造薬師如来および両脇侍（以上重文）が安置されており，三体とも関東以北では稀に見る鉈彫手法のもので，その彫像のうちでも最もすぐれたものである。さらに堂内には重文の木造阿弥陀如来坐像，薬師如来坐像，木造日光菩薩立像，木造月光菩薩立像，木造四天王立像などが安置されている。県下最古の獅子頭（県指定の民俗資料）といわれるもの，元文9年（1540年）の皮張替の墨書銘のある大太鼓（同上）その他，中将姫手織の蓮糸の曼陀羅，金具を用いた古い一流の大旗など寺宝が多い。また境内の鐘楼には暦応3年（1340年）12月15日鋳造の銘がある銅鐘（重文）があり，亭々とそびえる2本杉は最近県の天然記念物に指定されるなど，豊かな文化遺産を持つ寺である（以上文化財については後述の「文化財」の項参照）。この近くには七沢，広沢寺の温泉地があり，峰つづきに大山，丹沢へも出られ，閑寂そのものの霊場の感が深く，東京からの日帰りの散策には好適な所である。

c．安明院（秦野市蓑毛）　大山裏参道にあたる蓑毛にあり，俗に大日堂といわれている。伝によると，開基は行基菩薩といわれるが明らかでない。「新編相模風土記」によれば天平14年（742年）10月，覚王山五智金剛界大日如来大仏像を造って供えたとあるが，現在安置されている大日如来坐像とは異なるようである。なお附近には奥院として毘首羯磨作の不動尊を安置した不動堂，

図 5・14　安明院本尊（大日如来）

図 5・15　安明院本堂

閻魔十王の並ぶ「茶湯殿」という扁額のかかった正長元年（1428年）建立といわれる地蔵堂のほか，薬音寺，宝蓮寺などがある。

d．広沢寺（厚木市広沢寺）　広沢寺温泉のすぐ近くにある。創建年代は不明だが，応永年間頃了庵慧明がここに来て庵室を結び，「露柏庵」と号したのがそのはじめといわれる。後に上杉定正や北条氏綱等が再造営したとも伝えられている。ここには広沢寺温泉があるほか，丹沢登山のコースにもあたっていて，散策地として好適なところである。

e．正住寺（清川村煤ガ谷）　仏果山の麓にあり，南北朝のころ仏果禅師が争乱を避けてこの地に遁入し，ここに一寺を建立したものと伝えられている。仏果山の名は，その由縁によって名づけられたものといわれる。なおこの寺には，かつての丹沢入峯修行の証とされていた捨札が収蔵されており，現在発見されているものの唯一のものといわれている。

f．本陀寺（清川村金翅）　清川村の金翅にあり，開山，開創年代共不詳である。しかし，本尊の大日如来坐像は木像寄木造りで，鎌倉時代の作と伝えられている。境内には観音堂があり，木像十一面観音が安置されている。

g．蓮久寺（清川村船沢）　清川村と東の愛川町との境に近い部落の船沢にある。創立は慶長13年（1608年）9月と伝えられ，真如院日行上人が開山といわれている。境外城堂として七面堂がある。

h．徳雲寺（厚木市七沢）　厚木市の七沢温泉場の近くにあり，縁起は不詳である。境内には，七沢城主だった上杉七郎朝寧の墓と伝えられる，宝篋印塔がある。

i．観音寺（厚木市七沢）　徳雲寺と同じく，七沢温泉場の近くにあり，もと七沢古城鎮守の白山権現の別当であった寺である。縁起は不詳。

j．石雲寺（伊勢原町日向）　伊勢原町の日向薬師（宝城坊）から大山に登る道の途中にある。縁起によると，応仁のころ華厳法師玄真（または華厳の玄真法師）という高僧が山上に座禅修行

して一宇を建て，医王山雨降院と名づけたといい，後に現在の位置に移したという。この雨降山というのは，現在の大山のことと考えられる。境内には石尊大権現があり，その本尊の十一面観音は丹沢黒尊仏の本尊とも伝えられている。かつては，心願達成すれば木太刀の刀身を奉納する習慣があったという。

k．**浄発願寺**（伊勢原町日向）　石雲寺と同じ沢沿いにあり，もとはその沢の支流である一の沢にあったが，昭和10年ごろ地崩れのため現在の位置に移った。現在一の沢には同寺本堂跡と，洞窟などの遺跡がある。この寺は慶長年間以前の創建らしく，江戸時代中期に中興されている。伝

図 5・16　浄発願寺境内と地蔵像

図 5・17　大山詣での風俗

によると，開山の弾誓上人が山中の洞窟（現在一の沢の本堂跡にあるもの）に入って修業中，徳川家康がその窟前に来たとき，「禁山中殺生，僧俗悪口狼籍之事，一之沢二之沢竹木伐採之事」という山中制札を賜わったという。また上野東叡山中の護国院釈迦堂の常念仏は，当時より勤めるのが例だったともいう。現在境内には宝暦5年（1753年）7月仏生の銘のある銅造地蔵菩薩坐像（144cm）が立っているほか，本堂内には開山の弾誓上人銅像立像（68cm）がある。なお，この寺も日向薬師から大山にいたるコースの途中にある。

(3)　遺跡・風俗・その他

a．**大　山**（伊勢原町大山）　丹沢山塊からほとんど独立して聳える標高 1245 m の山で，その三角形の整った山容が特色的である。この山は昔修験の一大道場であった山であり，また江戸時代からは石尊権現といわれて関東の霊山となり，多くの大山詣での人びとを集めていた（神社の項の「阿夫利神社」参照）。もともと，わが国の農民，漁民には山岳信仰の念が強く，古くから代参

講などをつくって毎年きまって山入する習慣が各地にあったが，大山もそのひとつの山であり，その遺風を残す典型的な所である。現在参道の途中には先導師という看板をかけた宿坊が並び，さらに白衣姿の登拝者も多く見かけられるなど，ここ独特の環境をつくっていて，信仰の聖地らしい雰囲気をただよわし，かつての盛んだった信仰風俗を偲ばしている。またこの山の頂上には常に雲霧がかかり，しばしば雨をみるといわれ，そのために昔から雨乞いの祈願所ともなっていて，日照が続くと大山から水を受けて来て雨を祈っていた。この山が一名雨降山といわれるのはその故であるとされている。いずれにしても，山頂あたりからはこの山が古い時代からの霊山であったことを証する出土品も得られており，大山が古くからの山岳信仰の対象の山であり，南関東の宗教文化史上重要な位置を占めていたことを語っている。

b．**弘法山**（秦野市弘法山）　秦野市街地の東方約2km の地点にある標高約220 m の小丘で，弘法大師修業の地と伝えられるところである。伝によると，弘法大師は大同年間（806～9年）にこの地に錫をかけて千座の護摩を修したといわれ，弘法山の名はそのため起こったものとされている。山頂には弘法加持水や大麓に一石一字経を納めてその上に堂宇を建てたという経石塚などの遺跡が残っている。小丘ながら三面が開けているので頂上からの眺めがいい。なお，月遅れの盆である8月13日の夜には，「百八松明」の行事を行なって五穀豊穣，悪疫退散の祈願を行なっている。昭和25年には神奈川県の新八景のひとつに選ばれた。

図 5・18　弘法山の経塚

c．**物見峠**（清川村煤ガ谷）　大山三っ峰の山稜北部にある鞍部（標高約640 m）の地名である。旧幕時代に丹沢山中は「御林」と定められて，「一枝を折る者は一指を截るべし」という酷な「山中の掟書」によって厳重に山麓民の入山伐木をおさえていたが，それを監視する山中見廻り役として横野，寺山，宮ガ頼，煤ガ谷の四村が任ぜられていた。この峠は当時，煤ガ谷の見廻り物見の人達が通った峠で，「物見峠」の名はそこから起こったものであ

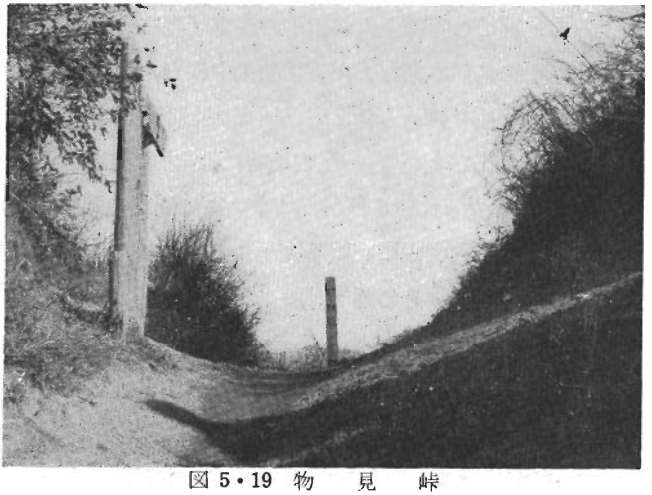


図 5・19　物　見　峠

る。「新編相模風土記」愛甲郡のころに「丹沢山御林見守の者通行の道なり。峠より大住，高座の二郡及び鎌倉，江の島，武州多摩，荏原，橘樹等の郡中を眺望す」とあり，広範囲な眺めのたのしめる所である。

d．**七沢城址**（厚木市大沢）　七沢温泉の近くの高台上にあり，「新編相模風土記」に「七沢城址，村の中程にあり，中古は山林なりしに今は白田を開けり，大手口の蹟は東方にあり，空堀の蹟彷仏たり。築城の始を伝えず。宝徳二年四月執事右京憲忠管領成氏と確執の時鎌倉山内の館を退き此城に楯籠り十月に至り和睦ありて鎌倉に帰る。其の後上杉修理太夫定正の持城となり」との記がある。いま本丸跡は平担な畑となっているが，西北の小高い丘の上に八幡社の小祠がある。これは当時東に山王社，西に熊野社，南に八幡社，北に諏訪社の四社が祀られて城の四隅の鎮護の守神であったものの中のひとつと伝えられている。現在ここは，七沢温泉からの散策の地として多く利用されている。

e．**札　掛**（清川村札掛）　中津川上流の丹沢山中に札掛という聚落がある。大山と塔ガ岳との出した長尾根に挟まれた藤熊川と盥（たらい）小屋沢との合流地点の小平地であるが，昔ここは木挽や炭焼きが入りこんで炭を焼いた所である。その当時のここの炭は「相模の白炭」といわれた良質なもので，茶の湯用として幕府の御用炭になっていた。しかしその後になってから丹沢全山が「御留山」として接収され，幕府の用材，薪炭の採地として山麓民は固く入山が禁じられた。そして山中の見廻り役に宮ガ瀬，煤ガ谷，横野，寺山の部落が任ぜられ，この部落の人達が交互に山内を巡視し，この地にあった高さ十二間，周り三間半の大欅（けやき）の空洞の中に見廻りの印の番札をかけた。このことから札掛の地名が生まれたものである。その大欅（けやき）は大正12年（1923年）7月の洪水で倒れていまはその姿をとどめていない。現在ここは小さな聚落となってなお炭焼きを行なっているほか，神奈川県の伐採地として特色のある環境をつくっている。なお，ここは東丹沢のひとつの登山口にもなっているので，丹沢登山者のこの地を利用する者は多い。

f．**東丹沢柏木林道**（秦野市蓑毛）　この林道は，現在東丹沢登山者が多く利用している。秦野市蓑毛部落からヤビツ峠に至る近道で，昭和6年（1931年），地元の柏木幹太氏が開鑿したものである。柏木氏はかねてから丹沢の開発を志しいろいろと構想をねっていたが，たまたま地元民が薪炭搬出路の近道のないことを嘆いているのを聞き新道を拓こうと決心し，地主達を誘って森林保護土工組合を結成，許可を得て直ちにこの林道の開鑿に着工した。工費はほとんど私財を投じて行なったが，神奈川県もこれに補助し，蓑毛部落のはずれの蓑毛橋の袂から現在のヤビツ峠まで約4km の間，幅員約2m の山道を翌年に完成した。柏木林道の名は，氏の功績をたたえてその名を冠したものである。現在新たにヤビツ峠まで県道丹沢林道（現在の自動車道）が完成しているが，登山者達はヤビツ峠まで多くこの道を愛用している。

g．**穴弁才天**（厚木市広沢寺）　広沢寺温泉の奥にあたる玉川上流の渓谷地帯にある。河岸の岩に直径約3m，深さ約2mの穴があり，その中に弁才天が祀られている。この穴は俗にお釜といわれ，もと雨乞いの奇習のあった所である。雨乞いの当日は村中の各戸からひとりづつの男子が

図 5・20　丹沢林道を開いた柏木幹太氏の墓

出席し，全員褌一本になってここの川中に入り，水を掛けあいながら褌の検査をし，最も黒い褌を締めていた者が奉仕者に選ばれ，選ばれた奉仕者は自分の褌をはずし，その褌で穴の中の弁才天を洗ったというものである。

(4)　年中行事

a．**筒粥神事**（伊勢原町大山阿夫利神社）　1月7日午前8時。これは粥占の一種で，管粥ともいわれ，葦，芋，竹等を釜の中に入れて粥をたき，空洞の中へ入った米粒の多少でその年の豊凶を占なう神事である。阿夫利神社では竹筒を用いその筒で粥をすくい，中に入った粥粒を1から10，11になるとまた1にかえして数え，数え終わった時の数，例えば作柄を占うに7で終わればその作物の本年の作柄は7分とみるのである。この行事はかなり古くから全国的にみられた民俗行事ではあるが，現在はそれを伝えているところは少なくなった。

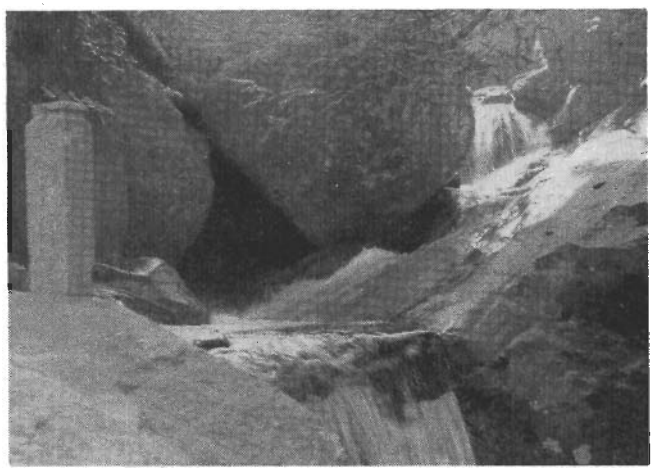


図 5・21　お釜弁天

b．**大山阿夫利神社節分祭**（伊勢原町大山）　2月3日。豆まきとともに，拝殿内で鳴弦の神事が行なわれる。

c．**大山阿夫利神社春季大祭**（同上）　4月5～20日。山開きの行事がある。

d．**大山酒祭り**（同上）　5月26～27日。阿夫利神社は早くから酒造の祖神としても崇敬されており，関東の酒造家たちの信仰も厚かった。当日は関東各地の酒造会社からの銘柄の異なる酒が数百種類奉納され，式典が終わった後唎酒会が行なわれる。それがすむと当日の参拝者にその酒がふるまわれるが，これが呑み放題なので人気をよんでいる。

e．**阿夫利神社夏季大祭**（同上）　7月27日。これは当社の例大祭で，続いて8月8日まで芸能祭が行なわれる。

f．**大山阿夫利神社芸能祭**（同上）　8月1～8日。阿夫利神社例大祭中のひとつの神事で，当社

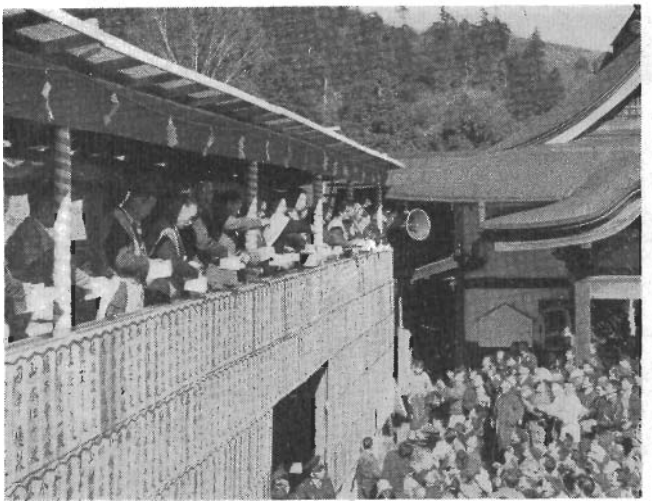


図 5・22　大山節分祭

の最も盛大な神事である。このお祭りには県指定無形文化財の倭舞のほか，古くから当社に伝わる同じく県指定無形文化財の巫女舞（後述の「文化財」の頃の「倭舞と巫女舞」参照），神秘的な能楽などが行なわれるほか，郷土民芸なども7日間にわたってくりひろげられて古社の祭典らしい雰囲気を盛りあげる。

g．**弘法山の百八松明**（秦野市弘法山）　8月13日の夜。弘法山東麓の南矢名，瓜生野部落の青年50人あまりが，一丈余の藁で作った藁松明を持って弘法山に登り，いっせいに点火して振りかざしつつ五穀豊穣，悪疫退散を祈願する。ここの古い行事は，日露戦争の時に一時中絶したが，明治38年（1905年）部落に集団赤痢が発生したことにより復活されて今日まで続いている。

h．**大山紅葉祭り**（伊勢原町大山）　10月10～11日。大山阿夫利神社の秋祭りで，地元でいろいろな催物が行なわれる。

(5) 民　謡

大　山　大山には「大山小唄」と「大山阿夫利音頭」のふたつの民謡があり，前者は全く大山の信仰思想を謡ったものであるが，後者は四季折おりの自然をおりこんだいわゆる「音頭」調の歌謡である。どちらもさほど古くからのものではないが，年中行事などの民謡大会をはじめとして，宴会の席などでもよくうたわれるものである。なおその他，「鶴巻音頭」「西秦野音頭」にも大山を謡いこんだ箇所がある。

(6) 伝　説

a．**光西上人入定地**（秦野市蓑毛）　蓑毛の大日堂の上手に地蔵堂があり，その隣に，一間半に一間許りの小さな囲いがある。ここは秦野曾屋に産まれた光西上人の入定の処と伝えられている。いまから200余年前，若くして高野山や比叡山の延暦寺に登り，多年修業した上人はこの地に来て大般若経六百巻の写経を発願した。そのころ，この地方が関東大飢饉のため庶民が生活に苦しむのを見て救おうとし，十日市を開いてこの地の繁栄の基礎をきずいたといわれている。また上人は写経六百巻が成就するや死期の迫ったのを知り，ここに穴を掘り，穴の中の鐘の音が聞えなくなったら埋めてほしいと遺言してその穴の中にはいり，地面には竹筒を出して空気穴として読経三昧に入った。土地のひとたちは野良の行き帰りに竹に耳をつけて幽かな鐘の音を聞いたとの話が伝えられている。上人の入定した日は享保12年（1727年）9月1日である。

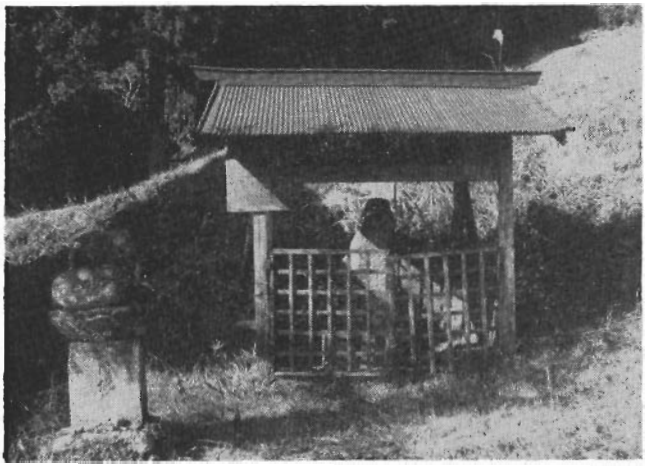


図 5・23　光西上人入定の処

b．**ヤビツ峠の餓鬼道**（秦野市東秦野）　現在のヤビツ峠の南側にある岳の台と二又峯の鞍部が旧ヤビツ峠である。この旧峠あたりの道を餓鬼道といっている。昔，札掛部落の人達の食糧はここから運ばれた。ここを通って秦野の町へ荷上げにも行っていた。札掛を出かける時には充分腹ごしらえをしてきたにもかかわらず，ここへさしかかると急に空腹疲労を感じて中には餓死した者もあったといわれ，その霊がとどまってそこを通る人を度々悩ましたそうで，そのためこの道を餓鬼道というようになったという。この道を通って峠を抜けると秦野盆地が真下に眺められる景勝の地であるが，現在では秦野に下る道が崩壊したため廃道になっている。餓鬼の出た所は，この峠から新道を横ぎって尾根道を下り，藤熊川の岐点の門戸口までの二，三町の間であったといわれる。

c．**日向薬師本尊と行基菩薩**（伊勢原町日向）　伊勢原町日向の宝城坊は俗に日向薬師というが（「寺院」の項参照），ここの本尊である薬師如来像（重文）は，行基が諸国巡錫中大和路を通行した時に見つけた癩患者を紀州熊野権現の神泉に浴させようとして背にしたところ，それが薬師如来の化身の姿だったことがわかり，その時「わが相を模して後の世に残せ」というご宜託を受けて行基が彫ったものと伝えている（像については後述の「文化財」の項参照）

d．**日向薬師の大太鼓**（同上）　日向薬師に県の重要民俗資料として蔵されている張り皮の破れた大太鼓がある。この太鼓は，現在の伊勢原町善波に昔三里四方を日蔭にしたという大楠があって，これの第三の枝で作ったものと伝えられ，日向薬師ではこの太鼓を打って時を知らせていたという。ところが，その太鼓の音は三里四方に響きわたり相模湾沿岸までも聞えて，その音のために魚が逃げて不漁になった。そこで漁師たちが怒って，日向薬師に押しかけて魚を引き上げる鈎棒でさんざんにその太鼓の皮を打ち破ったものだといわれ，それから後は皮も張らず，寺宝として現在まで蔵されたものと伝えている。この太鼓の胴は径 1.38 m，胴周 4.50 m，長さ 1.30 m で県下一の大きなものである。

e．**煤ガ谷の七不思議**（清川村煤ガ谷）　煤ガ谷は，もと炭焼きを業とした寒村であったが，現在では別所温泉もあって訪れる人は多い。ここに「煤ガ谷の七不思議」という古い伝説が残っている。それは次のような話である。

1）　不知の椿：大野部落に杉山という旧家があるが，この家の祖先に誠に親孝行な八郎左衛門重国というひとがいて，地蔵様に似せた父親の像を彫ってそれを背負い全国を二度も巡歴した。

さて三度目の巡歴をしようとしたその時父親が急に亡くなり，その時に自分の墓に椿を植え，それが咲いたら家運が開けるとおもえと遺言したという。ところが，その椿は毎年多くのつぼみをつけるが，まだ一度も開いたことがないというもの。

2) 雨降の松：村の鎮守八幡神社の下にもと松の大木があって，その松から常に水のしずくがしたたり落ちていたといわれる。いまは，道路改修のためにその松は切り倒されてしまった。

3) 横山の朝霧：宮ガ瀬寄りに横山という杉の山があり，この山には毎朝といっていいほど霧がかかるという。

4) 三度なりの栗：金翅部落の山田家の庭にあった栗の木は一年に三度実がなったという。しかも最初のものが枯れて次に植えたものも三度なり，またその次に植えたものも三度なったという。いまはその三度目の栗の木も枯れてなくなっている。

5) 女夫竹：下原部落の山田家では，1本の竹が中程ら3本に分れてすくすくと育ったかという。あまり美事で不思議なので日向薬師に奉納したそうである。

6) おとぼうが渕：宮ガ瀬に近いあたりの山の中に小さな渕がある。昔，夕暮れにこの渕のほとりを村の炭焼きのじいさんが通りかかって4尺もあるという大きな魚を見つけ，それをとらえて持ち帰ろうとしたら，後ろで「オトボウよ，オトボウよ。テンゴウボウが負われて連れて行かれるぞい」という声が聞えてきてじいさんはびっくり仰天して腰を抜かしたという。それから後，そのじいさんは死ぬまで，この渕のほとりを通らず，いつとはなく「おとぼうが渕」という名が生まれたという。

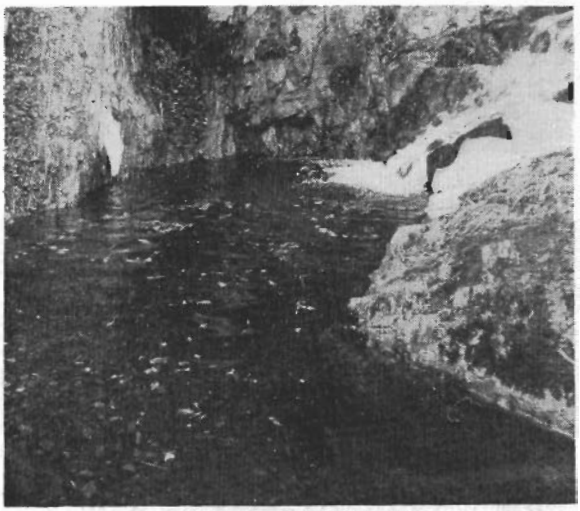


図 5・24　おとぼうが淵

7) 送り雀：山と竹藪の多いこの村には雀が多かったとみえて，その雀たちが送ったり送られたりしていたのをみて，不思議におもい，これをひとつ加えて七不思議としたものである。

f. **源氏河原と弘法大師**（同上）　煤ガ谷を流れる川音川に源氏河原という処がある。ここは昔弘法大師が全国巡錫中通りかかったところで，その時，この河原で里芋を洗っていた女を見つけてひとつ無心した。ところが大師を乞食坊主と間違えて，「乞食坊主にやる芋はない」といってその女は去って行った。そこで大師は止むをえず口の中で経文を唱えてその河原を離れていったという。以来，この源氏河原は，里芋を洗うころになると不思議に川の水が絶えて里芋が洗えなくなるという。

g. **煤ガ谷の駒ガ橋**（同上）　煤ガ谷の小学校の下に小さな橋がある。この橋は慶安4年（1651

年）8月1日，由比正雪の乱の残党を搦め捕った所であるといわれている。浪人者は，芝原亦左ヱ門，芝原七郎兵ヱ，渥美次郎右ヱ門に従僕の甚三郎の4名で，現在清川村の金剛山正住寺という寺に彼等の供養塔がある。この4名を村人から引きついだ代官所の役人が，この橋の上で馬の背に4人を乗せてつれて行ったので駒が橋の名が生まれたといわれる。

図 5・25　由比正雪一味の供養塔

h．**長者屋敷**（清川村宮ガ瀬）　清川村内の権現平から，中津渓谷に沿って30分ほど下った所に，長者屋敷または長者平とよばれる山中には珍しい平坦な所がある。ここには新田一族の落人矢口信吉が住んでいた処といわれている。

伝説によると，矢口信吉は武州六郷矢口の渡しで主人新田義興が殺されてより世を嫌い，愛娘と従者数人をつれてこの丹沢山中に身を隠し，入道して従者とともに川漁や猟，また川から砂金を採りなどして生活していたが，しだいに富みを貯え，鎌倉とも交易して大きな屋敷で豪華な生活を営むようになった。ところが，中津川に椀を流したことから宮ガ瀬の人びとに見つけられ，暴徒に襲われて殺されてしまったといわれている。

図 5・26　由比正雪一味の逃げこんだ山田家

i．**江の島**（清川村宮ガ瀬）　長者平の南方は中津川にのぞんで，その川中に江の島とよばれる一孤島がある。もとは縦15間（27m）に横5間（9m）ほどの島であったが，現在では洪水のためにわずかに昔の面影をとどめているだけである。昔ここには弁財天女の小祠が祀られており長者の黄金造りの蔵があったといわれている。さらに長者は長者平から江の島へ金の橋をかけて渡ったとも，1月元旦には必ずここから壮鶏の声が聞えたともいわれている。

j．**御殿森**（清川村宮ガ瀬）　宮ガ瀬村字馬場から丹沢三ツ峰への山伝いに，御殿森という所がある。昔長者が殺された時，その娘はここまで逃げのびたが，ついに追いつめられて黒髪にさし

た金の簪を喉につきさして自害してしまったところという。もとここには鬱蒼たる常緑樹林の下に石の祠があって，御神体に長者の娘の簪が祀られてあったそうである。なお，「新編相模風土記」によれば，「山中に御殿森と称し，樹木の茂れる所あり。信吉の女，父と共に害せられし時其髪の毛を埋めし所と云ふ」となっている。

k．**華厳山の子種石**（清川村華厳山）　厚木市と清川村の境に標高 602 m の一名名天丸ともいう華厳山がある。この山の尾根筋に，子種石とよぶ大石があって，蚕の卵がかえる時季になると，石の色が青みわたるといわれている。「新編相模風土記」愛甲郡の項に，「この山上に子種石と云うものあり。方五尺」と記されている。

l．**経ガ岳の経石**（清川村経ガ岳）　清川村と愛川町の境界に立つ経ガ岳頂上の西肩に，弘法大師の遺跡と伝えられている高さ4 mほどの巨石がある。昔，弘法大師は清川村で華厳経を研究しその写本をこの大石の下に納められたので，経石といわれるようになったという。「新編相模風土記」愛甲郡の項には，「古役小角華厳経を此所の石櫃に納む。依りて山名とせりと云う」とも，また「上萩野村松石寺の伝へには空海経を納めしと云ふ」ともある。しかし，当時は経ガ岳との山名はなく，「山名とせり」とは華厳経を納めたのでその名を華厳山としたという意味になっている。そしてその華厳経を納めた場所は仏果山と当山との界としている。さらに経ガ岳は，田代方面では「ホッケボー」とよび，行基菩薩が法華経を写経して埋めたとも伝えられている。

m．**もろこしを作らぬ村**（清川村法輪堂）　清川村の東隣に愛川という町がある。この町は中津川の中津渓谷を介して清川村に接しており，その中津渓谷の東北に三増峠という小さな峠があり，いまはバス通りになっている。この峠は永禄 12 年（1569年）武田信玄と北条氏康の合戦があった所で，北条氏が破れ，その落武者が清川村の経ガ岳に逃げこんだ。ところがそこには数百本の槍を立てて息をこらしていた武田勢の伏兵がいた。そこで落武者たちはこれまでと覚悟を決めて，懐中の経文や辞世を傍の大石の洞に納めて切腹してはてたという。しかし，落武者たちが槍とみたのはもろこしを切った後の茎であって，それゆえに，そこの村人たちは以来供養のためにもろこしを作らないことを誓ったと伝えられる。それから経を納めた大石を経石とよぶようになり，この山を経ガ岳というようになったという。これは，前述の弘法大師が華厳経を写して納めたという伝説に伴う異説である。

なお，江戸末期にこの村の一軒の農家が禁を破ってもろこしを作ったところ，真夜中になってその家の馬小屋に入れてあった馬が，馬小屋を抜け出して全部食べてしまったと伝えられ，しかも，馬小屋には馬が抜け出した気配はすこしもなかったといわれている。

3.　中部丹沢地帯

中部丹沢地帯は，丹沢山塊中の最高峯である蛭ガ岳を中心として，これを囲む塔ガ岳，丹沢山，三ツ峰，焼山，檜洞丸など，丹沢山塊中の主要地点一帯を占めており，山岳地帯としての自然的量感の最ももりあがっている地帯である。しかし，この地帯は秦野市，松田町，山北町，津

久井町，清川村と6市町村にわたりながらも，山麓地帯は秦野市，松田町，津久井町のみに有するだけで，文化景観は比較的乏しい。神社仏閣も小さなものがかなりあるにはあるが，いずれも創建や縁起からして明らかでないし，景観といえるほどの規模のものは乏しい。

しかしながら，深い山の中の昔からの生活が生んだ民俗や伝説には，この地帯の文化的環境を語ってふさわしいものが幾つかみうけられる。

(1) 神　　社

諏訪社（津久井町青根）　津久井町道志川沿いの青根部落にあり，諏訪明神ともいっている。祭神は産土神といわれているが，やはり長野県諏訪にある諏訪神社の末社に類するものであろう。かつて，諏訪族の勢力をはった時代に，あるいはここにその末社として迎えたものとも考えられる。境内には神緊殿，神殿のほか，樹令750年という大杉（県指定天然記念物）などがある。

(2) 民俗・伝説

a．塔の岳信仰（塔ガ岳）　現在，地図やその他の登山案内書には，塔の岳を塔ガ岳と記されているが，もともと塔の岳というのが正しいようである。「新編相模風土記」にも判然と「塔の岳」と書かれている。この山名は，大正12年（1923年）の関東大震災まで頂上北隅に，この山の神体として山麓地帯の農民の信仰をあつめていた「お塔」とよばれる高さ5丈8尺余りの巨岩があったことから出たものと伝えられている。この岩は雨乞いの神，または農神とも運の神とも麓の農民達から信じられていて，旱魃の時には必ずこの山に雨乞いをしていた。そのためこの岩は一般に「お塔」といわれてあがめられ，「お塔」のある岳という意味で「塔の岳」の山名が生まれたといわれている。ともかく，もともとこの山は信仰の対象になっていたことは，次のような伝えや遺風，また次に述べる「三ツの燈」の伝説のあることからでもたしかといえよう。

山麓地帯の古老達はさらにこの山を孫仏山，尊仏山あるいは狗留孫山ともよんでいる。これは「お塔」を別名「孫仏岩」ともいっていたことによるらしい。また，すでにこの巨石は震災で転落して姿を消しているが，それまでは5月15日がこの山の祭日とされ，当日は山麓の農民達が多く登拝し，登山路の平地には，旧幕時代からの目こぼし行事である登拝者相手の「運だめし」という野天ばくちも開かれていたほど盛んであったという。いまでも5月15日には山麓農民の登拝者があって，その信仰風俗の面影をわずかながらとどめているのがみられる。

なお，概説でものべたとおり，国定公園候補地の区域外にはなるが，この塔ガ岳の南麓一帯には菩提，坊，古堂，諏訪出，三廻部，彌勒寺等の仏教語や修験系社名を附した地名が多く並び，かつての山岳宗教の対象としての塔ガ岳信仰の盛んであったことをも語っている。

b．三ツの燈（三の塔山）　三の塔の山名は，その南麓横野部落にある唐土神社の縁起によるもので，この神社の祭神は昔，唐土から飛来してきたものと伝えられている。いま，秦野市横野の今井家に伝わる古文書によれば，信州木曾の井沢小六という者が，丹沢山中で白髪の老翁に会い，その老翁から「我こそ唐土から飛来してきた狗留尊大明神である。この山中にある仏体石（塔の岳にあった前述の尊仏岩のこと）は我が化身である」と告げられた。そこで小六は横野にささや

かな社殿を造って祀り，この附近を開墾した。ところが，ある時毎夜のように山中で光るものがあるのに気づき，それを調べに同志の今井兵部とともに裏山を登って行くと突如空高く燈明が輝いた。続いて二の燈，三の燈と三つの燈明が現われ，その燈が山に近づいて消えるや竜馬に乗った童子が出現し，ふたりに神像を渡して祀ることを命じ，さらに今燈の近づいた山が二の燈，三の燈という山名であると教えたという。そして現在表尾根コースの二の塔，三の塔の「塔」は，この「燈」の転化したものと伝えられている。

c．**日本武尊の力石**（三の塔山）　この岩は昔，日本武尊が東征の時，塔ガ岳へ登られる途中士卒が渇を訴えたので，尊が傍の巨石をお踏みになると，こんこんと清水が湧き出たというものである。今尊の足跡と伝えている縦 36 cm，横 24 cm の凹石の中に溜っている霊水は，いかなる旱魃の時でも涸れたことはなかったといわれている。かつてはその側に石碑があったが，明暦年間の地震のため埋没したと伝えている。

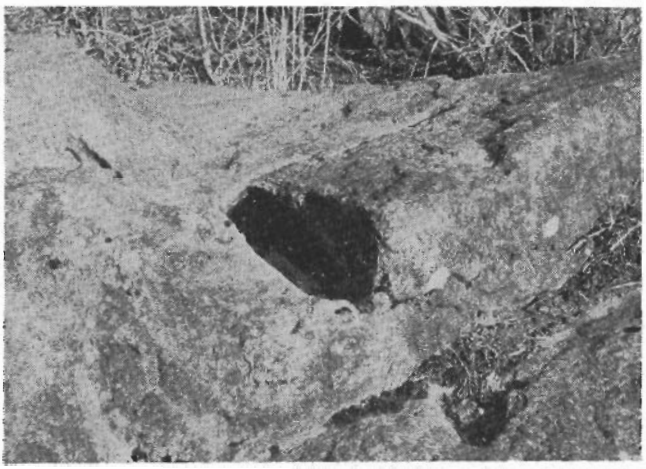


図 5・27　日本武尊の力石

d．**神の川の社宮司**（津久井音久和）　丹沢山塊の裏からの登山口にあたるところに音久和という部落があり，そこから 2 kmばかり上流の神の川と道志川の合流点あたりに社宮司沢という所があり，近くに社宮司橋という橋もかかっている。ここにババア宮という小祠があり，社宮司沢とか社宮司橋という名称は，もとそのババア宮をはじめ，神の川の上流の長者舎あたりにあるジジイ宮や折花宮を社宮司といっていたことから出たものらしい。昭和28年 3 月刊の「津久井郡勢誌」に「折花宮，ジジイ宮，ババア宮」の伝説が出ていて，その中に「神の川入口，社宮司にもババア宮がある」と記されている。

「折花宮，ジジイ宮，ババア宮」の伝説というのは，昔追手に追われた折花姫がジジイとババアを伴なって神の川上流に向かって落ちのびる途中，まず，ババアが音久和までたどりついた時に追手に殺され，ついでジジイが長者舎あたりで追手のために倒れ，姫もついに逃がれる力が尽きて自害したというものである。この伝説に因んで，ババアの殺された所にババア宮を祀り，そこからの山道を，姫がババアの冥福を祈るために念仏を唱えながら登ったということから「アミダ申し」とよぶようになり，またジジイの倒れたという所にジジイ宮を祀ってその附近を「カアイおね」とよぶようになったという。さらに姫の自害した所は長者舎の手前，トンネルを抜けたところの神の川を渡る手前だと伝えられ，いまそこの橋は折花橋と名づけられ，近くに折花姫を祀る折花宮という小祠がある。この伝説のせいか，この折花宮の附近の木を伐ると祟があるとい

われ，いまでも土地の人々は絶対にこのあたりの木を伐らないという。なお，そこから上流の「山の神」とよばれる洞窟附近には宝の甕が七つ埋められたとか，花折宮の近くの「ある木」の下には黄金千枚が埋められたとかの伝説もある。

以上の伝説に伴う三小祠がもと社宮司といわれていたものであるが，その社宮司といわれる小祠はいかなる民俗遺産であるかはまだ明らかにされていないが，柳田国男著「石神問答」によると，社宮司は武蔵，相模，伊豆，甲斐，信濃，遠江，飛騨，志摩，伊勢，尾張，三河の諸国にあって，西京以西や奥州にはないと書かれている点からして，あるいは狩猟民族として名を馳せた諏訪族の信奉した神ではないかと推測されているのである。

なお丹沢山中の所どころには，武田信玄の小田原城攻めにまつわる伝説や遺跡があるが，それらと考えあわせてみて，昔，丹沢から相模へかけての諏訪との交通はこの方面から通じ，一時は丹沢地方が諏訪文化の勢力下におかれていたこともあったと考えることもできるであろう。

e．**キビガ原**（津久井町焼山連山）　焼山から姫次へ向かう途中の中間に標高 1272 m の八丁の頭という三角点がある。ここはキビガ原とも俗称されているが，昔，長者舎の長者が開墾してキビを作った所だと伝えられ，その名が残ったところである。長者舎の長者というのは，前述の「折花姫」の伝説の異説で，いつのころか，親子三人連れの落人が神の川上流に世を忍んで平和な生活を営んでいたが，やがて都から討手が来て，一家全部が討たれたというものである。

f．**水無川**（秦野市）　水無川は丹沢山塊中の塔ガ岳を水源として秦野市に流れ下っている。この川は，昔橋がなく，渡舟で渡っていたという。そのころのある日，旅先で父親の急病を聞いた孝行息子が急いで帰る途中，この川の渡まできて金を使いはたしているのに気づき，船頭に懇願したが貪欲な船頭はそれを聞きいれず，仕方なく息子は裸になってこの川を渡る途中足を水にとられて水死した。それから後に弘法大師がこの地に来り，その話を聞いて大いに悲しみ，船頭に仏の慈悲について説き聞かせたが，船頭は「この乞食坊主め」と棹をふり上げてなぐりかかった。そこで大師は錫杖を河床に立てて経文をとなえたところ，水は錫杖の穴の中に吸いこまれ川は干上ったという。以来，この川は一年中水のあることは稀で，いつとはなく，「水無川」という名がついたという。

いまこの川の上流地帯は丹沢沢登りで賑わっているところで，その最も好適な場所になっている。したがって宿泊施設も多く，夏から秋にかけては涼しい山登りとして大いに賑わうところである。

(3)　民　　謡

a．**松田小唄**（松田町）　さほど古くからのものではないが，松田町名物が唄いこまれている中に，丹沢四十八瀬川の河鹿も折りこまれている。

b．**西秦野音頭**（秦野市）　西秦野はその大半を丹沢山地で占められ，昔から丹沢山塊は，ここの人びとの生活にいろいろな面から影響を与えてきた。その点からしても，ここの民謡は丹沢をぬいては成りたたないともいえよう。「西秦野音頭」も古くからの民謡ではないが，この中に以上

の丹沢とここの人びととの関係がよく表われている。

c．秦野たばこ音頭（秦野市）　秦野市は丹沢山塊の南にひらけ，煙草の産地として知られている。春のこの方面からの登山者は，この広びろとした煙草畑の眺めも楽しめるわけで，それは丹沢山塊とともに，秦野市の代表的な春の景観でもある。「たばこ音頭」はその秦野の煙草をうたったものではあるが，同時に，丹沢もこの地の農業と深いつながりにある関係からして，それを背景とした民謡としてまとめられている。そこに，この民謡には，秦野市の農業と丹沢との深い昔からのつながりがもりこまれている。

4.　西部丹沢地方

西部丹沢地帯は，丹沢山塊西部一帯の地域で，山北町一町で占められている。この地帯には大室山，菰釣山，三国山，不老山などの山々が立ち，その間を縫って中川川，世附川，玄倉川が流れていずれも落合で合流している。これらの水系沿いには小聚落が散在し，中川川沿いには中川温泉場もある。しかも山北町内には南北朝時代や戦国時代の遺跡や伝説も豊富で，したがって，ここの国定公園候補地内にもその頃から残されている民俗遺産もかなり見うけられるなど，山間地帯にふさわしい環境をもっているところである。

図 5・28　箒沢山の家

図 5・29　中川川千の背

(1)　神　　社

a．頼政神社（山北町神縄）　落合で三つの川が合流して河内川となって流れ下る途中の神縄部落にある。創建年代は不名だが，伝えるところによると，もとこの神社は源三位頼政を祀ったもので，頼政神社の名はそのためにつけられたものといわれている。社宝も多く，それに加えて一帯は渓流地帯としても美しいところで，春秋の散策地として好適な所である。

b．神明社（山北町共和地区）　北山町の大野山山麓の小さな部落である旧共和村にあり，かつてこの一帯が

共和村であった頃の総鎮守であった。創建年代や社伝は全く不明だが，この社の祭日に行なわれる「お峯入り」というこの地区一帯総出の行事は美事である（後述の「年中行事」の項参照）。

c．**大道祖神山**（山北町神縄）　山北町の神縄から玄倉に至る三神隧道のちょうど眼上にあたるところにある。僧像道祖神など2基の石神が安置されていて，さらに新しい僧像1体が下の桑畑の中にある。この大道祖神はいぼとり神といわれているもので，荒縄で石仏をしばっておくと，いぼが自然にとれると信じられていたといわれる。もとは山上に小さな祠があったと伝えられているのをみると，昔の街道はそこを通っていたものらしい。「新編相模風土記」には「大道祖神山，村の中央にあり」と出ている（足柄上郡神縄村――今の山北町神縄――の条）。

d．**宝生神社**（山北町中川）山北町の中川温泉場近くにあり，創建年代は不明である。祭神は八幡大菩薩，白山権現，須賀権現，熊野権現，稲荷社，第六天社などの合紀で，所ではムロオさん，オオムロさんとよんでいる。なお，この神社は，丹沢山塊中の一峰である大室山山頂にあった，大室権現をいまのところに移したものと信じられており，かなり古い歴史をもつ神社のようである。中川温泉からの散歩地として利用するのに好適である。またここには宝生神社の旧跡といわれるものもある。

図 5・30　宝生神社

(2)　**寺　　院**

a．**能安寺**（山北町世附）世附川沿いの山間部落の世附にある曹洞宗の寺である。創建年代は元亀3年（1572年），開山は行翁と伝えられる。この寺では，全国でも珍しい行法で行なわれる「百万遍念仏」が行なわれる。しかし，この「百万遍念仏」は，もともとこの寺の行事ではなく，同部落内にあった念仏堂で行なわれていたものである。この念仏堂は四間四面の建物で，地蔵尊が安置してあったらしいが，火災にあって焼けてしまったため，能安寺で「百万遍念仏」が行なわれるようになったもの（「百万遍念仏」については後述の「年中行事」の項参照）。

b．**満蔵寺**（山北町神縄）山北町神縄にあり，文明元年（1469年）の開山と伝えられる。本尊は木造の地蔵で，腹部に四角な穴が開けられ，その中にさらに木造地蔵菩薩坐像が安置されている。ともに江戸中期の作と伝えている。

c．**清竜寺**（山北町神縄）　同じく山北町神縄にあり，開創年代は正安年中（1300年前後）と伝えられているが，縁起は不詳である。境内背後の山林中には小規模ながら名瀑といわれる飛竜の滝があり，また庭前には由緒の深いものとされている弁天池があって，比較的環境のととのった寺である。

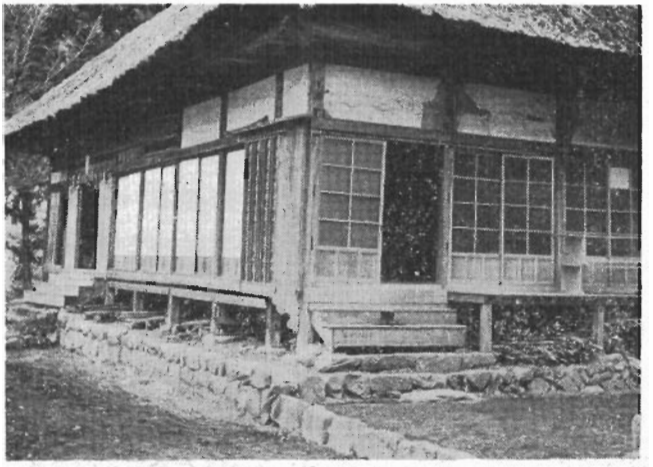


図 5・31 能安寺本堂

d. **玄倉寺**（山北町大仏） 山北町大仏にあり，もと玄倉村塔の平にあったものをここに移したものと伝えられている。その他縁起は不詳たが，開創年代は天正年代（1573～1591）といわれ，現在の地に本堂が建てられたのは，棟札によれば文政13年（1515年）11月10日らしい。

e. **実相寺**（山北町玄倉） 同町玄倉にあり，開山は寛文10年（1670年）といわれる。縁起は不詳だが元禄13年（1700年）の大震災で向山が崩れ，そのために寺が全部埋没したことがあると伝えられている。

(3) **遺跡・その他**

a. **城山城遺跡**（山北町大仏） 中川大仏の南東方，現小学校の東端の山続きに在り，東西 50 m，南北 130 m ばかりの平なところで，関東大震災前までは，高さ 1 m あまりの石垣と，長さ 36 m，幅約 11 m ほどの空堀が残っていたといわれている。この城はもと河村氏の持城であったらしいが，後は北条氏のものとなり，武田氏に備えた出城になっていたといわれる。「新編相模風土記」の「足柄上郡中川」の項には，この城について「昔河村氏の持城なりと云ふ。河村山城守秀高の氏族多く河村郷中に住みたれば，其れ等の持城なるべし」とあって，前記の堀等の間数が記載されている。河村氏は，南北朝時代の南朝方の武将であった。

b. **湯ノ沢城跡**（山北町畑） 現在の中川温泉の対岸，湯ノ沢にあって，これも城山城と同じく，北条氏が武田氏に備えて築いたものだと伝えられている。「新編相模風土記」にも「北条氏の支城にて，永禄十二年十二月，武田信玄の為に陥りて廢城となる」と書いてある。

c. **二本杉**（山北町上ノ原） 中川上ノ原から大又沢地蔵平に通じる峠に，老杉が 2 本高く天を突いている。そのためにここは二本杉峠といわれている。この峠は，前記湯ノ沢城の落城前までは，武田方の斥候がここから敵の行動を覗っていた所と伝えられている。

d. **城ガ尾**（山北町城尾峠） 世附の北，中川温泉の西北方にあたる甲州との境にあり，一説に信玄屋敷とも信玄平ともいわれているが，かつてはここを「城ガ尾通り」とも，「サガセ通り」ともいう古道が通っていて，甲州から小田原に至る近道になっていた。この道は永禄年間，武田信玄が小田原攻めのとき通過したと伝えられている。「新編相模風土記」にも「此の城ケ尾を信玄屋鋪とも唱ふるは永禄十二年，武田信玄此所に宿陣せし故なりと伝ふれば，信玄も此の辺に保砦を構えしか。……」と記されている。いま世附川の上流浅瀬からと，中川温泉から地蔵平を経て

道志川上流地帯に出るハイキングコースがここを通っている。

以上の遺跡は，いずれも戦国時代の武田氏と小田原北条氏との攻防を語るもので，当時この丹沢一帯はその戦乱の最前戦地帯となっていたことを語るものであり，一帯のそうした史的量感を盛りあげる遺跡として興味深いものがある。

e．**相甲の国境争い**　現在の西丹沢の北から西南にかけての境界線，つまり，青根から大室山，大界木山，菰釣山，高指山，三国山の線を結ぶ甲州と相模の国境，およびこれからさらに西に延びる甲州と駿河の国境は，旧幕時代の天保12年（1841年）から弘化4年（1847年）の7年間にわたって，相模，駿河の農民たちが甲斐の農民と争って制定されたものである。天保年間の度々の飢饉によって，丹沢山麓附近の農民たちの救いの道は，丹沢の薪炭資源によって米塩の資を稼ぐ方法しかなかった。そこで，当時まだ不明確だったこの一帯の国境線の争いが始まった。

天保12年（1841年）11月甲州平野村の名主長田勝之進は，相州世附，神縄，矢倉沢，谷峨の各村と駿州の中島村，上野村の農民達が薪炭材採伐のため国境を不法侵入したと江戸奉行所に訴え出た。それに対して相，駿の農民達もたちまち反訴に出て長い争いが続いた結果，甲州側が全面的に敗訴となって現状の国境線がきまったのである。これに関する古文書，地図等は世附や駿東郡平野等にいまも残っていて，当時の山間部に生きたひと達の切実な生活史を語っている。

(4)　年中行事

a．**お峯入り**（山北町共和地区）　20年か30年に一度行なわれる。前記山北町山間地帯の旧共和村に残る民俗行事で，平安中期から鎌倉時代にかけて盛んになった修験道の行法が祭典化され，その儀式が芸能化されて壮大な郷土芸能として伝承されているものである。口碑によると，この行事は南北朝時代の正平年間，後醍醐天皇の皇子宗良親王が新田氏等と河村城にたてこもって北朝方と対陣した時から始まった行事といわれ，以来，村の総鎮守である祭典行事として伝承され，昔は西方の標高 723 m の大野山頂上の竜集権現社まで行列が続いたという。

この芸能を行なうには78人という多人数を要し，服装や用具も多くの種類が必要で，旧共和村のような小村では経費の点や多数の人びとが技能の練習をするにしても，容易ではなく，毎年行なうことは不可能であった。それで20年，あるいは30年に一度行なわれるという珍しい行事となり，その芸能の演歴を新しいものの中から拾ってみると，文久3年（1863年）に行なってから明治31年（1898年），昭和9年（1934年），昭和25年（1950年）となっている。

「お峯入り」行列の編成状況を見ると，まず先頭に獅子2人，はらみおかめ1人，先払い2人，山伏4人，まとい1人，笛6人，太鼓2人，太鼓打2人，歌4人，まとい1人，先払い1人，棒6人，台弓2人，奴6人，力堂6人，先箱2人，弓6人，ほうかご2人，先払い1人，供物4人，国見役1人，大刀1人，立槍2人，御應1人，徒士2人，側士1人，殿様1人，側士1人，若殿2人，御傘1人，御手弓1人，立箱2人で以上78人となっている。芸能の構成はまず「道行」からはじまり，部落の中央から尾根伝いに神明社まで約3 km の道程をえんえんと繰込んで行く。神明社に着くと「満月の歌」「掛鳥能乏（かけどりのうじ）」の儀式を行ない，それから棒踊（修験者の陣衙の芸能

化）・鹿枝踊（風流なお練行列）・棒踊（鎮魂の意味を持つ）・修行踊（山伏の入峯修業作法の芸能化）・歌の山（歌垣のある山という意味を持つ）・まり遊び（平安から鎌倉期に流行した蹴鞠の様式）・五色踊（五穀豊穣の祈り）・棒踊（国土経営に努力することの誓いの表現）の順序で珍しい所作・舞踊・歌曲などがくりひろげられる。

この行事は修験道の行法が根幹となっているもので，それが祭事化され，さらにその儀式が芸能化されてゆく過程がよく示されており，唆示に富んでいる行事である。したがってこの行事はもともと修験者（山伏）の入峯行事だったものの芸能化と考えられ，この地帯のかつての民俗風習をいまに伝えているものといえよう。なおこの行事の夫ぞれの役割は各部落毎，また家によって世襲されているものである。県指定の無形文化財。

b．**百万遍念仏**（山北町世附）　2月15～17日。この行事は，足柄上郡の旧三保村（現在の山北町内）の世附部落に古くから伝承された行事で，毎年2月15日から17日までの3間にわたって，部落の高所にある能安寺の中の地蔵堂（念仏堂）で行なわれる。

念仏の当日は，堂間に菅草で作った注連縄が張りまわされ五色の弊で飾られる。中央には棒で作った梯子のような支柱に，欅製の珠数車（滑車直径 35cm）の樫の心棒を結びつけ，これに約13 mもある大珠数をかける（大珠数の珠数玉は一個 4.5 cm の水藤木でつくられていてその数は108個で百八煩悩をふまえての数である）。この大珠数の滑車のところに「中央大聖不動明王」の幣を掲げ，さらに五色に染めわけた紙がそれぞれの位置にさげられて飾られる。

百万遍念仏の順序は，まず祝詞奏上（山伏姿），降神，それから 230 人の念仏衆（老人）による念仏と若者たちによる大珠数の回し投げが始じまる。若者達が滑車の大珠数を力一ぱいにひっぱって後へ投げ捨てる。これを連続 12,3 度繰り返すと次の若者にひきつぎ，頑健な男子でも酷寒時に汗を流すほど豪快な動作がくり返えされ，3日間で百万遍になるのである。

この間，指揮者1人は算木をもって大珠数の回転数を計算し，かつ指揮棒を示して平念仏を，五色幣を示しては高音念仏を合図して三階音の念仏を唱和させ，それに大太鼓4，〆太鼓1，笛4の伴奏がつく。

この百万遍念仏といっしょに，伊勢代神楽系の二人立獅子舞が演じられる。これは「姫の舞」（サガリハと言い二人立の巫子舞。諸霊を慰さめるもの），「幣の舞」（一人立の獅子，右手に鈴，左手に幣を持つ。悪魔払いの清め），「狂い獅子」（二人立で獅子頭を手であつかう。神殿からの悪魔退散）からなり，楽器には笛，太鼓，鉦がつく。この形態の獅子舞は本県下でも珍しいものである。

獅子舞が終わると，つぎに青年達によって二上り舞（ヒョットコ面の踊り），おかめの舞（オカメ面の踊り），鳥さし（花笠と鳥さし棒をもった鳥さしと鼓役との掛合いと踊り）の神楽が始まり，それが終わると念仏衆は大太鼓の周囲に集まって，「融通念仏なむあみだ」を10回くりかえして3日間にわたる行事を終わる。

以上の世附百万遍念仏の特徴は，珠数車を青年達が引き投げまわす豪快な行事であることと，

神仏混淆の修験道行事であることである。もともと，百万遍念仏は浄土宗四本山中のひとつである京都の知恩寺第八世空円が，元弘元年（1331年）に疫病退散祈祷の勅命を受けて参内し，紫宸殿で7日間の百万遍念仏を修し霊験があったことによって，後醍醐天皇から百万遍の寺号を賜わったのにはじまるといわれる。しかし，ここの百万遍念仏は，後醍醐天皇の皇子宗良親王が後村上天皇の時，征夷大将軍として山伏姿に身をやつしてこの地に来られ，当時ここにあった念仏堂で百万遍念仏を修めさせて王政復古と民衆の安寧を祈願されたのに始まると伝えている。

しかし，その形態は，知恩寺系の百万遍の前駆形態と推測される。そして木製の車は「後生車」と称して，いまなお諸所の寺院の堂前にかけられるものと同系統のものである。その最も世に知られているのは，山形県の立石寺の車で，ここのは後生車が卒塔婆に附加されて数千本も立っており，その中には中世のものすら存在するという。

いずれにせよ，この世附の百万遍は，一般の通念によって考えられる百万遍とは異なる行法で念仏行事研究の重要な資料とされているものである。

以上の百万遍念仏に代神楽やおかめ，ひょっとこの舞がついているのは，山深い世附部落でもあって，日ごろ町へ出て芸能をみる機会もないことによるための，余興として加わったものであろうと推測される。

(5) 民　　謡

お峯入りの歌（山北町共和地区）　この民謡は，前述の「お峯入り」の行事の歌で，かなり古くから伝わっているものである。各々の芸能毎に別の歌があって，いずれもよくこの地区の古くからの民俗行事の唄としての素朴さを表わしている。歌詞は次のとおりである。

「満月の歌」

満丸にそれやあしる，満丸にそれやあしる，十五夜の月の，十五夜の月の嫩の如く

「鹿 枝 踊」

おんこりや，なにおどり，こりや，なにおどり，かしえおどりをおどるよいよ，おーどるよ

おん先は鎮守のかしえおどり，弓や太刀持ち旗さして，ほこに長刀持ちつれて，ほろをゆするぞ，おもしろや，ほろをゆするぞ，おもしろや

（以下2句目の神社名が伊勢の大神，鹿島神社，熊野神社と変わるだけで歌調は同じ）

「修 業 踊」

おんこりや，なにおどり，こりや，なにおどり，修業おどりをおどるよいよ，おーどるよ

おん我は，木山羽黒山の山伏，諸国巡りて修業する，峯にすむこそ限りなく，終生とげたぞめでたしや，終生とげたぞめでたしや

（以下，2句目の山名が当山愛宕山，当山富士山，本山熊野山と変えるだけで歌調は同じ）

「四節踊」（まり遊び）

おんこりや，なにおどり，こりや，なにおどり，四節おどりをおどるよいよ，おーどるよ

おん春は，花咲く桜の下で，くつをそろえてまり遊び，くれかのーしぐれーのくれかの

（以下，2句目の季語がすずしき柳，色づく紅葉，つめたき小松と変わるだけで歌調は同じ）

「五色おど」

おんこりや，なにおどり，こりや，なにおどり，五色おどりをおどるよいよ，おーどるよ

おん青きもの，とくさかりために筐柳，沢の根笹に峯の松

おん赤きもの，あかねあかいと，あかしやぐま，朱の杯に，えびのもりもの
おん黄なるもの，きねだ，口なし，らこん染め，黄金装束に，山吹の花
（以下略）

(6) 伝　説

a. 信玄の隠し湯（山北町中川）　現在の中川温泉は，古くから「信玄の隠し湯」として知られていた温泉である。伝によると，戦国時代に武田信玄がこの地を経て小田原城を攻めた時，負傷した将兵をこの温泉に入れて休養させたといわれている。いまその湯は，中川川の河畔にあって，信玄館という温泉旅館の傍に残されている。

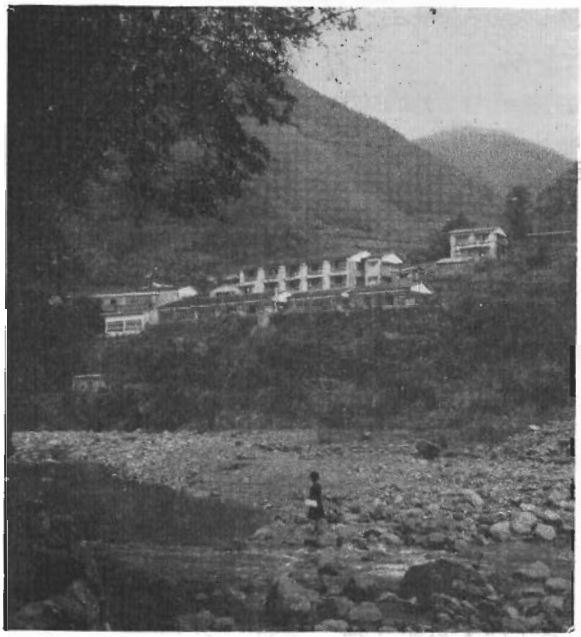


図 5・32　中川温泉

b. 諸士平（山北町玄倉）　玄倉川の上流地帯にある玄倉部落から6kmばかりの山奥にある平な所で，安政年間，紀州の浪人15名が，江戸において謀反を起こそうとしたが事破れ，この地に逃げ込んで時の来るのをまっていたが，生活に困り，木工，林業等で暮しを立てていたところという。かれらは明治維新の戦乱が起こってから何処へとなく姿を消してしまったそうで，里人達はそれからここを諸士平といっている。ここは，いま玄倉からユーシンに至るコースの途中にあたっている。

c. 塔の平（同上）　玄倉部落から約1km東方にある。ここは幕末の頃，勤王の士が，佐幕派と戦い破れて秦野から秦野峠を越えて，当地に至り一宿して長州指して落ちていった所と伝えられている。またここにはかつて玄倉寺の分寺もあったが，いまはただひとつの塔と梅の老木が寂しく立っているだけである。

d. 箒　沢（山北町箒沢）　ここは山北町の一番奥の部落で，中川川上流地帯にあたり，かなりかけ離れた小部落である。そこには天然記念物に指定されている箒杉といわれる杉の巨木が立っている。

この箒沢は昔源義経をかくまった奥州平泉の藤原秀衡の家臣で鰐口伊賀守が主家没落後隠れ住しだ所と伝えられている。その後，小田原北条氏時代になって，川下に箒が流れついたので，代官が調べてみたところ部落のあることがわかり，ここを箒沢と名づけたと伝えている。

なお，はじめ一族の主家が藤原であったことから，それに因んで氏を佐藤と名のったため部落全部が佐藤姓となり，現在でも古老たちは邦利さんの家を本家とよび，その上段にある菊芳さん

の家を「お方」とよんでおり，それが奥方の住んでいた家と伝えている。さらに，その他牢屋敷の敷石だったという礎石や，武器を埋めたという兜石などが畑の中にある。

e．**前尊仏**（山北町玄倉）　塔ガ岳に，黒尊仏（狗留尊仏ともよぶ）という巨岩のあって信仰されていたことは前にのべたが，玄倉方面からここまでは山道を4里も登らなければならないので，ちょっと簡単にはお参りにゆけないことから，この土地の人びとは玄倉川上流の川上にある山の中腹の大岩を前尊仏とよんで信仰していた。この岩も黒尊仏同様に岩上に登ると神罰てきめんといわれ，現在ここには川上の発電用放水管が敷かれているが，その工事の時にこの岩にハッパをかけたがあまり堅くてノミがきかず一部粉砕したのみで終ったのはその神罰の顕現であって，ハッパもはねとばしたのだと古老たちはいっている。

f．**その他の伝説地**（山北町）　その他，西丹沢地内には武田信玄の伝説地として，玄倉に信玄試掘の金山といわれるところがあり，また津久井町との境町になっている犬越路は信玄が犬を先導として越えた峠であると伝えている。

〔参考文献〕

1)　西角井正慶編「年中行事辞典」（東京堂）
2)　民俗学研究所編「民俗学辞典」（東京堂）
3)　望月信亨編「仏教大辞典」（世界聖典刊行協会）
4)　久松潜一他編「日本文学大辞典」（新潮社）
5)　「柳田国男集」（筑摩書房）
6)　「観光神奈川見聞記」（神奈川県）
7)　「神奈川の歌と民謡」（神奈川県観光協会）

Ⅱ．文化財および天然記念物

1．国指定の重要文化財

(1)　**大山寺本尊**（伊勢原町大山）

この寺の本尊は鎌倉時代作の鉄造不動明王で，それに矜羯羅，制多迦の両童子が脇侍としてついている。鎌倉時代の作品としては，鉄で造られた点が，まず珍しいものとされ，眼が後補の玉眼嵌入ではあるが，その両眼を剛き，歯牙を露わにした形相も特色的である。全体的に鎌倉時代の精神が盛りあがっていて，豪壮な趣のあるものである。

なお，この不動明王を作った時の試作品があり，現在鎌倉の覚園寺に蔵されている。

〔高さ〕105.4cm
〔製作年代〕鎌倉中期
〔重文指定年月日〕昭和3年8月17日

(2)　**日向薬師**（伊勢原町日向宝城坊）

宝城坊に安置されている本尊の木造薬師如来のことで，俗に宝城坊が日向薬師といわれるのは

この本尊のためである。像は木造の薬師如来坐像で，それに日光，月光菩薩立像が両脇侍として附属している。平安時代の作と推定され，鉈彫の一木造，うるし塗りの金泊押しで，横に特色のあるのみ目をはっきりと残した素朴なものである。伝によると，この寺の開山行基菩薩が，素材に桂を用いて自ずから刻んだ一刀三礼の彫刻であると伝えている。

〔高さ〕210cm（左脇侍 123.4cm，右脇侍 121.7cm）
〔製作年代〕平安時代
〔重文指定年月日〕明治33年4月17日

なお，この寺にはそのほかに次のような国指定の重要文化財の彫刻を蔵している。

木造阿弥陀如来坐像　1軀

大正6年4月5日指定
高さ 270cm，鎌倉時代の作，表面うるし塗り金泊押し。

木造薬師如来坐像　1軀

大正6年4月5日指定
高さ 210cm，鎌倉時代の作，表面うるし塗り金泊押し。

木造日光菩薩立像　1軀

大正14年4月24日指定
高さ 255cm，鎌倉時代の作，表面彩色。

木造月光菩薩立像　1軀

大正14年4月24日指定
高さ 255cm，鎌倉時代の作，表面彩色。

木造四天王立像　4軀

大正14年4月24日指定
高さ各 186cm，鎌倉時代の作，表面彩色。

木造十二神将立像　12軀

大正14年4月24日指定
高さ各 160cm，南北朝時代の作，表面彩色。

銅　鐘

大正14年4月24日指定
暦応3年（1340年）12月15日の銘あり。

2. 国指定の天然記念物

箒　杉（山北町箒沢）

山北町の中川川に沿う中川温泉上流にあり，県道に沿った直立する杉の大樹である。その形が箒に似ているので箒杉の名がある。樹勢は今なお旺盛で幹の部分にも殆んど損傷がなく，県下における巨樹として有数なものである。

〔高さ〕約 45m（目通り 10m，根廻り 18m）
〔指定年月日〕昭和9年12月26日

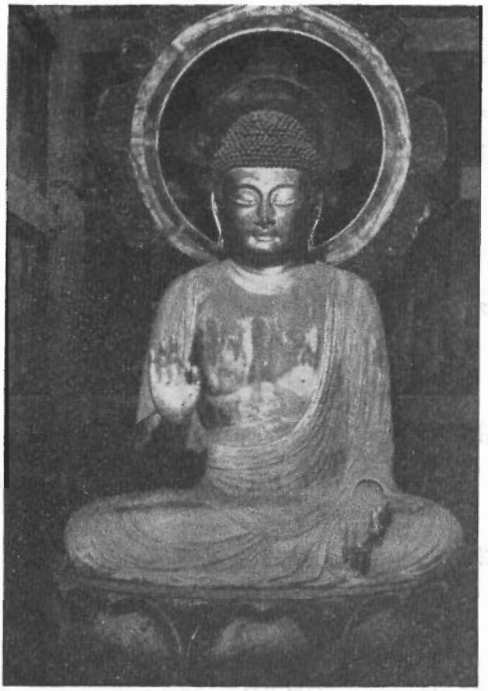


図 5•33　木造阿彌陀如来座像

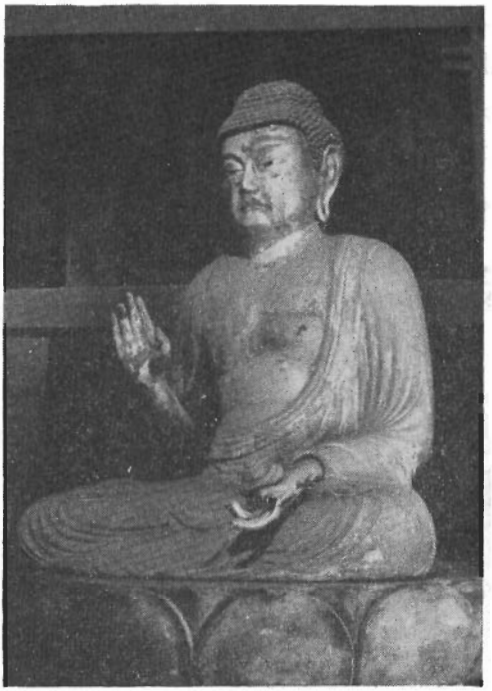


図 5•34　木造薬師如来座像

図 5•35　木造日光月光菩薩立像

図 5•36　木造四天王立像

図 5•37　箒杉

図 5•38　宝城坊の二本杉

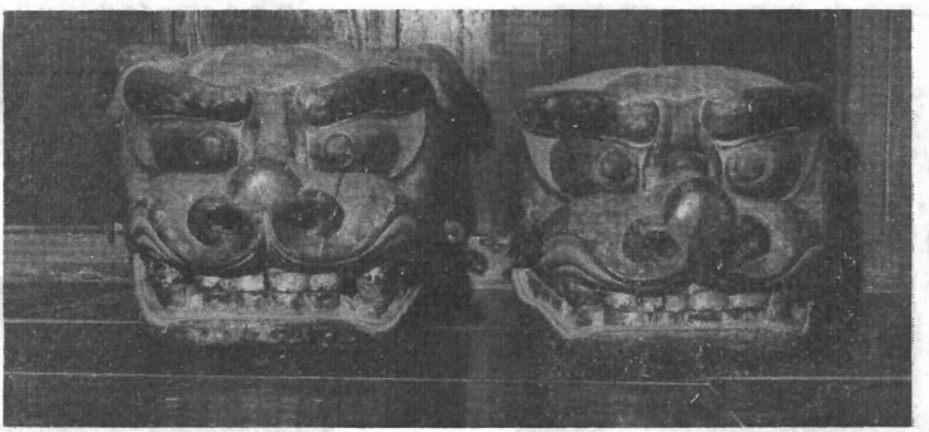


図 5•39　獅子頭

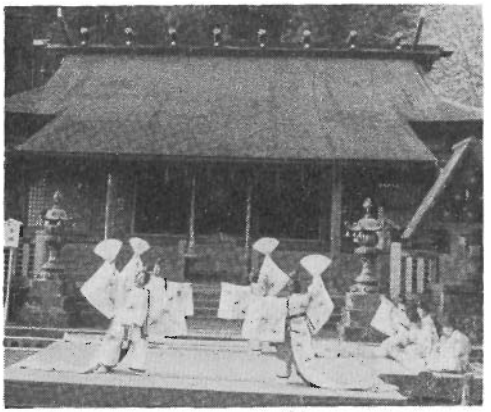


図 5・40　倭舞

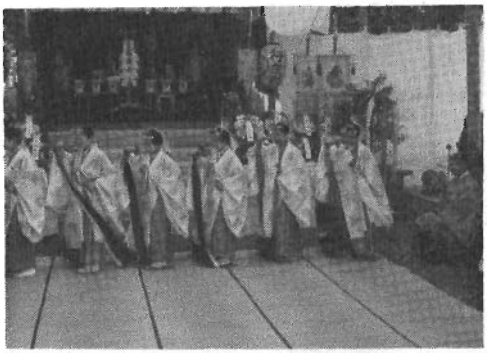


図 5・41　巫子舞

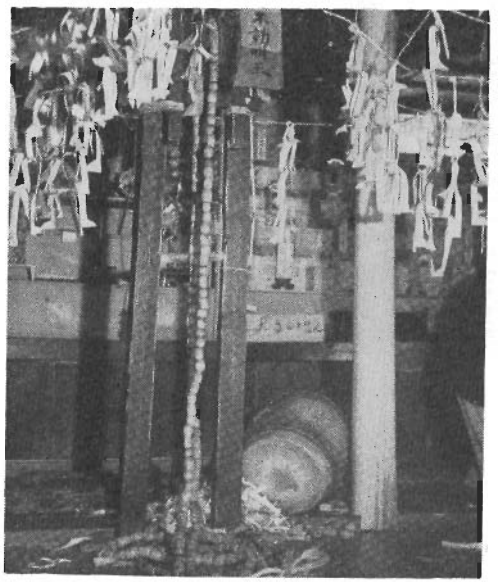


図 5・42　百万遍念仏

図 5・43　お峯入り(1)

図 5・44　お峯入り(2)

図 5・45　お峯入り(3)

3.　県指定の文化財

(1)　倭舞および巫子舞（伊勢原町大山阿夫利神社）

大山阿夫利神社に伝わる神楽舞で，明治6年奈良の春日神社の神官富田光美から，当時の大山阿夫利神社の神官だった権田直助が直接伝授を受けたもので，その後たえることなく当社の祭事に奏進され続けてきたものである。現在，倭舞は11曲，巫子舞の方は9曲現存している。中でも倭舞は応仁の戦乱後絶えていたものを，たまたま，富田家にその曲が厳存されていることがわかったことから，徳川中期の桃園天皇の寛延年中これをとって復興されたもので，その後は春日神社のほかに宮中で催されているだけだった。大山の倭舞もこれと全く同一の伝統をもつものである。しかも11曲という多数が保存されているところは，宮中はもちろん，春日神社においてすらいまは無いといわれる。

巫子舞は6人の童女と1人の白拍子（童女）によって舞われるもので，これも春日神社から伝えられたものである。これらの神楽舞は，ヒチリキ，琴，横笛，笏拍子，ドビョウシ等の楽器を用い，保安3年（1122年）の春日神社古譜によって演奏される。

なお，当社には，この他に神秘の祭事といわれる鎮魂祭，ヒキ目の神事ならびに田舞も同時に春日神社から伝承され，今日もなお連綿として保存されつづけている。

〔指定種目〕無形文化財
〔指定年月日〕昭和29年3月30日

(2)　お峯入り（山北町共和地区）

北山町共和地区の総鎮守である明神社の祭典に行なわれるこの地区の民俗行事である（詳細は527頁「年中行事」の項の「お峯入り」参照）。この行事はおそらく平安中期より鎌倉時代に盛行した修験道の行法が根幹となって祭事化されたものと考えられ，儀式が芸能化さらる過程を示すものとして頗る示唆に富んでいる。すなわち棒踊，修業踊等がそれである。

また，蹴鞠の附加されていることは「東鑑」の記事と照応してこの祭事が起こった時代を暗示しているようにおもわれる。なお「お峯入り」には風流といわれる万燈や花飾を持物とする美しい踊りが加わっている。その扮装や振り付けには時代の新しさがみえるが，この風流と山伏行事の芸能がいつ合体したか，あるいははじめから一体となってこの「お峯入り」を構成していたかどうかは不明である。これは今後に残された興味のある問題である。

〔指定種目〕無形文化財
〔指定年月日〕昭和28年12月22日

(3)　百万遍念仏（山北町世附）

百万遍は全国に普遍する念仏行事である。南北朝時代，京都知恩寺に発祥したという伝承がある。その行法は，長大な珠数を，円座せる信者たちが念仏とともに繰り送るもので，百万度にして止むという。全国に行なわれている百万遍はこの行法のものが圧倒的に多い。世附の百万遍は，これとは別の行法で知恩寺系の百万遍の前駆形態と推測される（詳細は528頁「年中行事」の項の「百

万遍念仏」参照)

〔指定種目〕無形民族資料

〔指定年月日〕昭和33年1月14日

(4)　諏訪社の大杉（津久井町青根）

諏訪神社は津久井町青根の役場支所近くにある。この神社の大杉は御神木として近在の里人に崇められてきたもので，社殿の傍に立っている。主幹は雄大で直立し天を圧すの勢があり，枝は頗る良く繁茂し，樹勢は旺盛である。

〔高さ〕45.5m（目通り 9.1m　根廻り 12.5m）

〔指定種目〕天然記念物

〔指定年月日〕昭和28年12月22日

(5)　宝城坊の二本杉（伊勢原町日向）

宝城坊の本堂のすぐ前に立っている2本の杉の巨木で，樹勢旺盛で直立し枝振りも仲々よく美事である。

〔根廻り〕大 7.8m，小 5.5m。

〔指定種目〕天然記念物

〔指定年月日〕昭和30年11月1日

(6)　大太鼓（伊勢原町日向宝城坊）

宝城坊が所蔵している。楠の木の枝をそのまま胴とした直径 1.38 m，胴廻り 4.50 m，長さ 1.30 m の県下最大の大太鼓で，源頼朝が富士の巻狩りの時用いたものを寄進したものと伝えられる。現在，この太鼓は張り革がすっかり剝ぎ取られていて，わずかにその一断片を残すだけであるが，天文9年（1540年），宝暦4年（1754年），文化5年（1808年）に革張り替えの墨書がある。なお，現在張り革が剝ぎとられていることについては，この太鼓の音が余りにもよく響いて大きいので，そのために相模湾の魚が逃げて不漁になり漁師たちが怒って剝ぎとったものと伝えている（517頁「伝説」の項の「日向薬師の大太鼓」参照）。

〔指定種目〕民俗資料

〔指定年月日〕昭和30年11月1日

(7)　獅子頭（2個）（伊勢原町宝城坊）

宝城坊に蔵されている県下最古といわれる二つの獅子頭がそれである。

この獅子頭は胴の中にふたりのひとが入って舞う本系の獅子舞に用いられたもので，その形貌は魁偉で迫力があり，鎌倉時代から室町初期の製作と推定されている。またアゴの植毛穴に残っていた残毛を科学検査したところ，シュロと馬らしい毛，さらに不明のものがあったと結果が報告されており，植えた時期は江戸時代と推定されている。なお，この獅子頭は宝城坊の大法会の供養舞として舞ったものであろうと考える向きもある。

〔指定種目〕民族資料

〔指定年月日〕昭和30年11月1日

（神奈川県観光協会）　日本観光協会専門調査員　原　尾　秀　二